

「西田先生は愛する人の死をどのように乗り越えられますか？」

平成 30 年 1 月 31 日

●なおとさんからの質問

いつも有意義な動画に感謝しています。西田先生ではなく、西部先生についての質問で申し訳ありません。僕が西部先生に出会ったのは大学時代で、それから今に至るまで先生の著作を読み漁ってきました。ですので、自裁して果てるという先生の最期は予期できていたつもりです。とは言いつつも、先生が亡くなったという一報を聞いてからここ数日は何も手につかない状態が続いています。予想はしていたものの、先生が世界からいなくなってしまうという現実をどうしても受け入れられないようです。そこで三つほど質問させていただきたいと思います。一つ目は、西田先生は今回の西部先生の逝去をはじめとして、愛する人の死をどのように乗り越えられますか。二つ目は、故人を偲ぶ意味も含めて、西部先生との心温まる、または愉快的思い出を教えてはくださらないでしょうか。三つ目は、今回の西部先生の自死という最期について、西田先生は肯定的なのか、否定的なのかについて教えていただきたいと思います。

●西田昌司の答え

私は4年ほど前に妹を亡くしました。妹はANAのチーフパーサーをやっていましたが、勤務中にアメリカのホテルで突然倒れてそのまま帰らぬ人となりました。妹はまだ若かったですし、まさかそのような形で死ぬとは思っていませんでしたから私は非常にショックでしたし、私の母も娘の死を受け入れられずに悲しみに暮れていました。今でも死んだという実感が湧きませんし、兄弟が集まった時には死んだ妹がいないのが何か不思議な感じがします。とは言っても、そのような悲しみも時が経つにつれてだんだんと薄まっていくものです。

それにひきかえて、西部先生の死は全く違います。西部先生はもうすぐ79歳を迎えようとするお歳でしたし、もうこれまでに十分に生きてきたとおっしゃっていました。西部先生は最期は自裁して果てるとずっと公言されてきましたし、これ以上生き長らえると家族をはじめとする周囲に心身両面の苦痛を与えるだけ、と見通せる状況になったのであれば自ら死を選ぶべき、と説かれて、そのような死を「簡便死」と表現されていました。ですから私は今回のことは覚悟していましたし、西部先生の死に対しては悲しいというよりも、これまで西部先生が展開されてきた言論を見事に実践されたという点において敬意すら抱くものです。

西部先生との思い出話は数限りなくありますが、私が国会議員になる前、京都『発言者』塾の世話人代表を務めていた頃の話をしてしましよう。西部先生は『発言者』という論壇誌を創刊・主宰されて東京『発言者』塾なる塾を開かれましたが、東京のみならず、『発言者』の姉妹雑誌として北海道で『北の発言』、京都で『京の発言』といった雑誌が刊行され、札幌『発言者』塾、京都『発言者』塾といった塾もまた開かれたのです。『京の発言』の主幹は佐伯啓思先生が務められましたが、京都『発言者』塾発足のこけら落としとして西部先生と小林よしのりさんを迎えての大講演会が催されました。企画者の私は、講演会が終わってから西部先生や小林さんと一緒に飲みに行ってカラオケ屋に行ったのですが、そのカラオケ屋は今よくあるような個室のカラオケ屋ではなく大部屋でした。

その大部屋にたまたま柄が悪いおじさん達が入ってきたのですが、その頃は西部先生はよくテレビに出演されていたこともあって、おじさん達が「あっ、この人知ってる～」といった具合に西部先生にからかい言葉を投げつけ始めたのです。そんな無礼な客であれば店の方も静かにさせるべきでしたし、私も仲裁に入るべきだったのですが、残念ながらそうはならずじばしの時が流れました。すると西部先生が「この馬鹿者！」とおじさん達を怒鳴りつけて追っ払ったのです。

この場面に遭遇した小林さんは、これが起爆剤となって西部先生と絶縁さ

れたようです。その頃、小林さんは西部先生と『本日の雑談』という対談本をシリーズで出されていましたが、「ある出来事がきっかけとなって、わしは西部邁と縁を切った」といった風に二人の関係はぷつりと切れてしまいました。その出来事というのが、あのカラオケ屋での出来事だったのです。もちろん、その前から二人の間でいろいろとあったのでしょうし、その真相は私にはよくわかりませんが、今にして思うとすごい場面に居合わせていたのだな、と思います。

西部先生は議論するのが好きな先生でした。お酒の席でも、皆が一つのことについて議論すべきというお考えでした。しかし、参加者が十人を超えると隣同志で勝手に喋り出したり、女性が席を回ってお酌をし出したりしてその場のまとまりがなくなってしまうものです。そうすると西部先生は機嫌を損ねられて「馬鹿者！君たちはまとまって一つの議論をすることすら出来ないのか。何のためにここに集まっているのだ。何のために僕を呼んだのだ。そんなことなら僕はもう帰るよ」といった具合に叱られたものです。西部先生の言われたことはごもっともでありますし、苦い思い出ではあるのですが、今となっては楽しい思い出でもあります。

私も、西部先生と同じような最期を遂げられたら立派だとは思いますが、頭ではわかっているけど西部先生のように実践するのはなかなか出来ないものです。また、西部先生のような死には前提がありまして、もうこれ以上やることはない、というくらいにやり抜いた後でなければ死に輝きを与えられないのです。西部先生は、世の中に憤慨したとか、奥様に先立たれて感傷的になったとかの理由で自裁されたのでは全くありません。西部先生は「死の選択は生の選択にほかならない」とおっしゃられていましたし、遺したい書物は全て書かれました。パソコンが普及した時代にあっても自分の手で原稿を書くスタイルを貫かれていましたが、晩年は手が不自由になってしまい、最期の書『保守の真髓』は娘さんに口述筆記してもらって完成させたのです。頭はクリアだったとはいえども、体が不自由になってきて昔のように講演したり著述もできないとなると、これが最期だと思い定められたのでしょう。

西部先生は、自裁によって最期に生き様を我々に示されたのだと思います。約 20 年前に評論家の江藤淳が、亡くなった奥様の後を追うように自殺されましたが、西部先生はその死に対して女々しい死に方だと批判されていました。また、三島由紀夫の死に対しても、三島は自衛官に決起を呼び掛けたが誰もそれに応じようとはしなかったことに憤慨して熱狂の中で死んでしまった、と否定的に話されていました。もしも三島が自身の思想を実現しなかったのであればもっと他のやり方があったし、あのような死に方は無駄であったとおっしゃっていました。西部先生の死は、江藤淳や三島由紀夫の死とは全く別物でありますし、やるだけのことはやった上での西部先生の死は多くの人に死生観を問いかけたのでは、と思います。

西部先生とは月に 1~2 回はお会いしていましたが、それが叶わなくなったのは寂しくはありますが、西部先生にあることを聞いたらこうやって返してくるだろうということはもう十分にわかるつもりです。これからは残されたものが西部先生に代わって西部先生の思想を継承すべきだと思いますし、それが西部先生への何よりの手向けだと思います。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>